

サレヨ

瀧沢 鈴

山を背にして扇のように広がっている函館の町の西部は、特に坂が多い。

昭和も初めの頃、私の通っていた小学校は女子校で弥生坂の一番上にあり、そこから坂二段下がった所に男子校があった。

冬の間のこの坂はとても滑るので馬車は勿論、自動車も自転車も通らない。だから子供達の格好な遊び場になる。

柳の木が芽吹き、川の氷が溶け始める頃になると、学校帰りの私達はこの坂に雪ダムを作り始めるのだ。

あの日も私は四、五人の友達とランドセルをガタガタ鳴らしながら一つ下の坂まで駆け降り、坂の上から流れてくる雪解け水を堰き止めてダムを作り始めた。両足で出来るだけ沢山の雪を集める。ダムは大きければ大きい程後の面白味が大きいのだ。

ダムが出来上がるとこんどは水路だ。何本もの細い水路を作り、水が一度に流れ込まないように工夫をする。だから結構時間がかかる。

ダムの中に水が入り、余った水が横の出口からゆっくり流れ出て行くのを見ると嬉しくなって、バンザイをして喜んだ。

ダムが出来上がる頃、そのダムを見て笑いながら坂を登っていく男子校の悪童一団七、八人。

「あれっ、上林かんばやし歯医者りょうのうちの良君りょうがいるよ」

私の横にいたまりこが驚いた声で言った。男の子らは皆手作りの小さい櫓を持っている。櫓と言っても四角い板に竹すべりの竹を二本付けた物や、小さな鉄板の切れ端を何枚も打ちつけた物等、作り方はさまざまである。

良君、上林良太は歯医者かんばやしりょうたの家の子で、学校では学級委員長なのだ。なんであんな連中の中に良君がいるんだらう。しかもちゃんと手作りの櫓まで持っている。私達はおしゃべりをしながら坂の上を見たが、その姿はもう見えなかった。

しばらくすると坂の上の方からザラメ雪のすれる音がして、櫓と一緒にかん高い叫び声が聞こえてくる。

「サレヨサレヨ。あぶねどサレヨ」

小さな櫓に両膝をのせ、時々片足で櫓を漕ぎ速度をつけながらダムをめがけて滑り降り

てくる男子校生。それを見ると私達も黙ってはいられない。両手を広げダムの前に立ちただかるのだが、櫓の勢いには勝てず逃げるのがオチである。

やがてダムは見事に打ち砕かれ、中の水は豪雨のような音としぶきをあげて流れ出し四方に飛び散る。頭からすっぽりこのしぶきを浴びた櫓の上の子らは奇声をあげ、顔いっぱい口にして「ガッハハハ、ワッハハハ」と笑い顔を更に赤くして、

「サレヨサレヨ。あぶねどサレヨ」

と叫びながら次なるダムを探しながら滑り降りていくのだ。中には櫓の勢いに負けて櫓から振り落とされている者もいた。皆びしょ濡れに濡れているが、そんなことはおかまいなし。サレヨ、サレヨと叫びながら飛んで行く。その間私達は「キヤアキヤア」と黄色い声をあげながら、しぶきのかからない所まで逃げる。だからダムは大きくて頑丈な程水の散りざまも大きいからとても面白い。

坂のあちこちから聞こえてくるこの叫び声に、道行く人々は笑いながら見ていく。

三人のおばさん達が立ち止まり、この様子を見て指差しをし、大声をあげて笑っていた。

「あれ、あの端っこで指さして笑っている人って良君のお母さんじゃないの」

まり子の言葉に私達は一齐にその方を見た。

「そうだ歯医者のおばさんだよ」

「良君びしょびしょに濡れてさあ、家に帰ったら叱られるよね」

私達はこういいながら顔を見合せて笑った。

それから二日程過ぎた朝、私が学校へいくと待っていたようにまり子がやってきて、

「あのね、昨日うちのお母ちゃんが上林の歯医者に言ったら、良君のおばさんに会ったんだって。私ね、うちのお母ちゃんにこの間のダム作りの話をしていたものだから、おばさんに『この間のダム壊し、良君びしょ濡れだったって、後が大変だったでしょう』と言ったら良君のおばさんね『そうなの、でも男の子だもんね。あの位元気のあった方が私は安心するわ。だから言っちゃったの。今度やる時は雨合羽を着た方がいいよ』ってね。うちのお母ちゃんびっくりしたって。そしてね良君のお母さんって理解度抜群だね、お母ちゃんなら怒っちゃう。雷ものだねって言ったの」

と私に言った。私はこの話を笑いながら聞いていたが、私の家だったらやっぱり雷ものかなと思った。

寒さの厳しい一月二月はかまくら作りや坂すべり、雪ぶつけ等をして遊ぶが、寒さが緩んで雪解け水が流れるようになると、何ととってもこのダム作りが一番面白い。

とにかくこの時期のこの坂は、子供達にとっては天国であった。こうして時が過ぎ楽しかった冬の遊びも一段落すると進級の春がやってくる。六年生になると受験勉強があるか

ら雪ぶつけやダム遊びも五年生までのこと。

翌年の三月、私はこの小学校六年生を卒業した。またこの学校の男子校と女子校が統合され新しい立派な校舎に建て替えられたのもこの年の四月からであった。

あれから何十年経ったであろうか。昭和が過ぎ、平成、令和と年号が変わった今、私は娘に言う。

「私が子供の頃の町は活気があふれていたよ、勿論コロナ禍なんかなかったから、皆大声でおしゃべりをし笑い合って、いつも暮らしに明るさと楽しさがあったね」

いつの間にか鉛筆を置き、目を細め遠くの山々を見つめながら話す私は完全に小学生の頃、いやあのダム作りの世界に入りこんでいるのだ。

「よく覚えているよ。サレヨ―サレヨ―、あぶねどサレヨ―って。忘れられないよね。そうだ五年程前に函館駅前通りでまり子に会ったの。前に会ったのは終戦直後だったから何十年振りかしら。とても懐かしかったわ。まり子、素敵なおばあちゃんになってね。横に白髪で眼鏡をかけたおじいさんが小さな男の子を抱いて立っていたけど、そんなことは気にしないでお互い夢中で話し合ったわ。すると話の途中で急にまり子が、紹介するわ、このおじいちゃんは私の夫でーすって言ったの。びっくりしたわ。ところがそのおじいさんは真面目な顔をして、私はまり子の夫、上林良太でーす。この子はひ孫の上林浩一こういちでーす。どうぞよろしくって言うじゃないの。よく見たら確かに良君よね、まり子しらーっとした顔をしてね、こういう事になったの。ふふふって笑ったけれど、私は本当に驚いたわ。三人揃って駅前交番の、いや浩一君も入れて四人揃って交番の横路地に入って三人三様、それぞれ記憶をたどって話し合ったけれど、何と言っても話は昔の遊び仲間の消息が一番。しゅんいち俊一君は航空隊に入って南の空で散った話。昭雄君はシベリアに抑留されて凍土の土と化したこと。ダム作りの仲間の時ときちゃんちゃんは満洲へ行ったけれど、終戦で日本に引き揚げてくる時、大変な苦勞をしたと言う話等々、戦中戦後の友達の話ばかりだった。こう言った小学校時代の思い出話が佳境に入った頃、良君が改まって『あの坂での事覚えてるか』と。『覚えているよ、あれは忘れられないもの』『じゃあ一丁やるか』ってね、三人顔をつき合わせて、一、二の三サレヨ―サレヨ―。あぶねどサレヨ―ってね。それから良君大きな口を開けて、ガツハハハって笑ったの。通りを歩いている人達は不思議そうな顔をしながらも笑って見ていくし、私達も恥ずかしいやら可笑しいやらで困ったわ、そして又の再会を約束して別れたけれど……。解るかなあ、こんな時の気持ち」

空を見上げ、青空の間を泳ぐイワシ雲を見追いながら話す私をじいっと見て話を聞いていた娘は、

「人生は紆余曲折って言うけれど、そんな生易しいものじゃないんだよね。特に戦中戦後を過ごして来た人達って、私達の想像もつかないような大変な苦勞をしてきたんだ」

しんみりと言った時のに娘の目には、小さな雫が三つ四つと光っていた。外地から引き揚げてきた人達の話の思い出したのであろう。

娘は一息つくと言知り顔で静かに言った。

「ママも年とったもんだね」と。

私は娘の顔を見ながらそつとつぶやいた。

「サレヨサレヨ。あぶねどサレヨ」

すると娘は私の顔をじいっと見ながら、

「サレヨサレヨ。あぶねどサレヨ」

と言うと声をたてて笑った。

若き日、当時の世相に翻弄させられ、それ等を乗り越えてきた私の仲間達は今どうしているだろうか。もう一度見たい聞きたいあの笑顔とあの声を、そしてあの時の叫びを。

「サレヨサレヨ。あぶねどサレヨ」